

幼稚園 大学との連携をいかした幼児教育

附属幼稚園教諭 山本 祐子

毎週木曜日は、虫はかせの日

附属幼稚園の現在の園長は動物学の専門家、自然環境教育センターの教授でもあります。子どもたちからは「虫はかせ」と呼ばれていて、園内で見つけた虫や草花、キノコなど、珍しい自然物を見つけたら、「はかせ」に聞きに行きます。週に1回の「虫はかせの日」を、子どもたちは楽しみにしていて、「この虫何だろう」「これも聞いてみたい」と、「虫はかせ」に教えてもらいたいことをたっぷりためて待っています。そして「これクチベニマイマイです」



鹿の下あごにははがないんだよ

うねんで」などと、保育者も驚くような専門的な言葉を使ったり、虫の細かい模様や特徴を捉えようと、真剣なまなざしを向けたりしている子どもの姿を見ると、実際に触れて体験することが子どもの力になっていくのだと、その大切さを改めて実感します。

虫はかせの講義！

生き物や自然に対する興味を幅広く広げて欲しいという思いから、年長組の子どもたちを対象に、「はかせ」に話をしてもらう機会も設けています。「ダンゴムシの足は何本？」「ザリガニはどうやってご飯を食べるの？」子どもたちにとって身近な生き物をテーマにした「はかせ」の話は面白く、子どもたちも真剣そのもの。子どもたちは「はかせ」ならではの専門的な話を喜び、真剣に聞き入っています。本物に触れ、心が揺さぶられる経験が大切に



木の中にあるこの虫なあに？

たいと思っています。

大学施設や人的環境を生かして

その他に、大学附属という本園の特色を生かしたさまざまな保育実践をしています。教育実習だけでなく、保育現場での経験を積みたいと希望する熱心な学生

小学校 子どもの健やかな成長に向けて

附属小学校教諭 小畑 治

はじめに

子どもたちが路地や空き地にみんな集まり、日が暮れるまでたくさん遊んでいた風景は、今や昔話になりつつあります。現在は、遊ぶ場所が少なくなっただけでなく、安心して外で遊ぶことさえ難しくなっています。そのため、子どもたちの体力・運動能力の低下、健康への悪影響、さらには情緒の不安定や社会性の育ちにくさといった問題が看過できない状況にあります。このよう



バルシューレマーク

な状況の改善のために、附属小学校では大学の保健体育講座と連携をして、

バルシューレとは

「バルシューレ」という言葉はドイツ語ですが、英語で言う「ボールスクール」すなわち、ボールゲーム教室という意味です。これは、大学が1997年から交流している、ハイデルベルク大学との共同研究によって導入された「子どもボールゲーム指導プログラム」です。子どもたちが楽しく取り組めるゲームがたくさんありますが、特定の球技種目に取り組むのではなく、どの球技種目にも共通する基本的な動きを大事にしています。いろいろなボールを使ったり、さまざまなゲームに楽しく取り組んだりしながら、自然

と基礎的な運動能力が身につくように工夫されている素晴らしいプログラムです。

取り組みの様子

附属小学校では、毎週火曜日の放課後に小学校の体育館で『バルシューレ』をしています。指導には、大学の保健体育講座の先生や大学生が毎週来てくれます。子どもたちからの人気も高く、毎回汗をいっぱいかいてゲームを楽しんでいます。保護者からも、塾ではなく学校が開催してくれることを喜ぶ声を聞いています。

おわりに

昔のような遊び場所を作って、日が暮れるまで遊ぶことは困難です。しかし、昔を懐かしむのではなく、今、できることにチャレンジすることが大切です。大学と附属小学校が手を取り合って、子どもたちの健やかな成長を願い、研究と実践を進めていきたいと思います。



ボールを追いかける様子

中学校

ESDの理念を学ぶ 教科活動と学校行事

附属中学校副校長 植村 啓介

本校では、2006(平成18)年度から研究テーマとして、五ヶ年計画の「ESDの理念に基づく学校づくり」を掲げています。ESD(Education for Sustainable Development)について早くから研究されている奈良教育大学の田淵五十生先生は、関連のシンポジウムへの参加や、世界遺産教育の立場から本校の「奈良めぐり」等の活動の発表を通して「協力や」指導をお願いしています。昨年は、教科との関連性を考えた研究会も開きました。本年度は、教科と教科外活動の実践を再構築していく教育研究の3年次で、サブテーマは、ESDの理念を学ぶ教科活動と学校行事です。

この紙面をお借りして、附属中学校の学校行事をESDの視点から紹介します。一年生は、五月の野外活動として、「泊二日」で国立曽爾青少年自然の家に行きました。夜のキャンドルファイアでは、ほのかな明かりの中で、御杖村真菅の幽玄で迫力のある獅子舞を見せていただき、村に伝わる伝統文化を鑑賞することができました。二年生は、五月に二泊三日で、答志・鳥羽・伊勢地方への臨海実習に出かけました。一日目の活動は、海の博物館での学習と漁家訪問です。学芸員・平賀さんのボラの話をはじめ、博物館では、伝統的な漁業とその背景に流れる漁村の信仰がよくわかり、

自然やいのちの営みをよく捉えた先人の知恵と、共同体の工夫を学ぶことができました。それは夜の漁家訪問で、直接漁師さんから聞き取る中で、より強く実感できたと感じます。二日目は、浮島で多様な磯の生き物たちの観察に夢中になっていました。新しい試みとして、答志中学との神楽を通じた舞の交流会を行いました。夜の講座は、昨年までの寝屋子と漁協、海女の話を、新たに答志と奈良をつなぐ歴史講座、伊勢湾の環境に関わるお話を二講座持ちました。三日目の活動では、「水系」というテーマで捉える試みをして、宮川河口の大湊の干潟にある、碎波帯ネットでの生物調査を行いました。ESDという切り口から、臨海での体験が、地域や自分の未来の生き方につながっていく学びへと、広がっていったのではないかと考えています。三年生は、四月に三泊四日で沖繩修学旅行に行きました。一日目は、平和ガイドさんの案内を聞きながら沖繩平和祈念資料館に行き、その後、魂魄の塔の前で平和宣言を行い、次にガマ体験を経て、平和の大切さを確認しました。夜は、傷病兵の世話をしておられた方から当時の生々しいお話を伺い、事前学習だけではわからなかった戦争の悲惨さ、平和の大切さ

が、保育ボランティアとして子どもたちに関わることもあり、いろいろな人と接する中で学びも多いと考えています。また、大学の図書館で開設されている「えほんのひろば」の利用や、大学の研究室を訪問する機会を設け、隣接する大学を活用した豊かな生活を園児が楽しめるように工夫しています。

を知ることとなりました。

二日目は、学生ガイドさんと、南部戦跡を中心に見学をした班、泡瀬干潟でエコツアーに参加した班、植物園に行った班、辺野古で地元のおじいちゃんとおばあちゃん話をした班、宜野湾市でインタビュー活動に取り組んだ班、世界遺産巡りをした班、そして五組は小校の塔前で平和集会、さらに農業体験とさまでました。夜は会沢芽美さんの平和コンサートが開催され、生徒たちも朗読や歌で参加しました。三日目は体験学習の日として、慶佐次川でのカヤックとマングローブ観察、三線、エイサー、紅芋農業体験等々、沖繩の自然と文化を満喫しました。一年生は曾爾の二日間、仲間と助け合ったり協力したりしながら、それぞれに成長して帰ってきました。二年生はESDという切り口から、臨海での体験が地域や自分の未来の生き方につながったのではないかと考えます。三年生の沖繩修学旅行では、現地での活動を通して、「平和の大切さ」を実感として知ることができました。宿泊行事は、学校では得られない貴重な経験ができる場です。

このように本校では、持続可能な未来のための教育として、「人権教育」「環境教育」「世界遺産教育」「平和教育」「他文化共生教育」に焦点を当てて、学校活動を行っています。

